

第5回諏訪湖環境研究センター（仮称）のあり方検討会における主な発言

R1. 6. 18 クリーンレイク諏訪

■環境学習、情報発信の取組

(沖野委員)

- ・諏訪湖環境研究センターは、県全体の水環境を扱うということであるが、今の資料は、諏訪湖のみの記載となっていて、他の湖沼・河川に関する項目がない。県全体を扱うということを知るようにしたほうが良い。

(小口委員)

- ・学びの場を活用しながら、遠隔地との交流ができれば良い。県内の湖沼・河川の関係者や、琵琶湖や霞ヶ浦の研究センターとつなぎ、バーチャル会議や事例発表会などができると良い。

(今井委員)

- ・国立環境研究所の本部は茨城県つくばにあり、私共の琵琶湖分室、福島県に福島支所とあり、それぞれ離れている。そこでテレビ会議で3カ所を結び、三元中継で会議を行っている。こうしたものを駆使して、遠く離れているという不利な点を解消するのは良いアイデア。

(沖野委員)

- ・掲げられている取組は、既に様々なところで行われているものであり、諏訪湖環境研究センターは新しく何をやるのかが分かりづらい。コーディネートについてもどんなコーディネートをどのような形で行うのか記載する必要があるのではないか。
- ・例えば、今、話のあった多角的に遠隔地との連携ができるシステムを入れるなど、他ではやっていないものを打ち出す必要がある。

(小口主幹（百瀬委員代理）)

- ・岡谷市子どもエコクラブでは、実際に体験したり、調査したりしているので、多機能スペースを使わせていただくという点ではありがたいが、スペースだけあっても道具がないと厳しい。水生生物を見ようとすれば、顕微鏡、ルーペ、トレーなどがあって初めて研究ができる。市民が使う前提であれば、そうした点も検討して、使いやすいスペースにしていきたい。

(宮原委員)

- ・学習スペースと多機能スペースを1つの部屋に収めることは難しい。実験をすれば手も洗うし、汚れる。書架の隣では、実験はやりづらい。実験室ということであれば、下が汚れても大丈夫なところでないといけない。どれ位のスペースに何をつくるという話がない中だが、これが全てだとしたら少し寂しい。

(今井委員)

- ・文献収集については、全てデジタル化できないか。見ることにに関して、今の若者は紙ではなく、デジタルで見ることが多い。デジタル化して、スペースに空きがでたところを、好きに使えるスペースとしたほうが良い。
- ・目玉ということならば、デジタルアーカイブで諏訪湖の全てを見せる。それを売りにするするのも1つである。

(沖野委員)

- ・資料収集の中身については、例えば県のプロジェクトの報告書の中にある1次資料を集めることは可能か。1次資料を集めることができなくなると資料収集は余り意味がないものになってしまう。

(山崎委員)

- ・スカイプを使った会議などは当たり前の状況だが、少し先に行く感じで、諏訪湖の中が見えたり、水に乗って旅をする体験ができたり、御神渡りの音の感覚や水の張る瞬間の感覚を施設の中で体験できて、実際に自然の中でも体験できる。そのように、行ったり来たりできる施設があると良い。

(樫尾課長（花岡委員代理）)

- ・ターゲットをどこに置くかということもあるが、今の小学生はある程度情報が入っており知識が高い。環境学習をするに当たっては、机上の学習は重要だが、現場に行くことが一番。センターから現場の諏訪湖に降りられる場所があればありがたい。

(今井委員)

- ・ドローンで空から見た諏訪湖の風景や、水中ドローンで湖の中がどうなっているか見られる映像があるとうれしい。

(宮原委員)

- ・収集する研究資料は紙ベースのものだけでなく、例えば、毎月諏訪湖の水を1ℓずつ採って凍らせておけば、後に改めて解析することができる。水がいいのか、プランクトンがいいのかはわからないが、実際に諏訪湖にあるものを残していくのも楽しい。

(是永課長（小野沢委員代理）)

- ・アカデミックな調査研究の部分と環境学習との議論が混在している。ターゲットを明らかにして、そこから枝を張っていくという整理のほうが良いと感じる。

(井上委員)

- ・学びの場について、学習スペースは、資料コーナーを大きく取り、閲覧や学習のスペースを設けるとすればある程度のスペースは必要。多機能スペースで体験学習を行うとなると床が汚れるし、水道設備も必要となる。
- ・体験学習は、生徒が何人来るかでテーブルの数も変わる。生徒がここで独自に勉強するとなるとグループごとにテーブルは1つずつ欲しいので、テーブルやイスは小分けにしたほうが良い。

(増澤委員)

- ・学習や体験を一つの箱の中におさめなくても、せつかく湖周があるので、今回の体験はここで、次はここでというように移動して行くのも1つの手。
- ・諏訪湖の近くに住んでいても、諏訪湖の中は見たことがないという印象。水中を1年中見られるということでも、一つの目玉となるのではないか。

(降幡委員)

- ・机上での学習はベースとしては必要だが、右から左に抜けてしまう。机上の勉強をした上で、諏訪湖など実際の現場で実体験をする。そこまで踏み込むと体を動かして頭に入ってくる。身近なところで体験することが、諏訪湖を知ってもらう取りかかりとなる。そういう体験を常設してやるのが非常に大切と思っている。

(仙波委員)

- ・環境保全研究所の飯綱庁舎では相談や支援に非常に熱心に取り組んでいる。生態系の面では、センターと飯綱庁舎が十分連携する必要があるということを以前にも発言させていただいた。学習交流や情報発信の面でもノウハウを持っているので、是非飯綱庁舎のそうしたノウハウを活用していただきたい。
- ・学びのスペースについては、少なくとも水回りを備えた実験台的な部分は必要。

(田村委員)

- ・情報コーナーの情報検索端末が3台ということだが、2022年の業務開始を目指しているセンターであるので、来年には5G通信網も整備が始まるし、3年後、5年後を見据えた学習支援、情報発信という観点で色々な機能を盛り込んでもらいたい。

(小口主幹(百瀬委員代理))

- ・実体験が必要との話。小学生には座学だけでは分かってもらえない。だから勉強したことを持って現地に行く。そういった点が子供たちの印象に残る。実際に理解が深まる。センターも、そこから現場に行けるということが大きい。船に乗って諏訪湖に出られればなお良く、そうしたことも考えていくと幅が広がる。

■連携・共同実施ほか

(今井委員)

- ・資料のネットワークのイメージでは、センターが研究をやっていくというイメージが湧かない。センターが研究、あるいは調査的機能を担うとなると、研究と調査機能及びコーディネーションが必要となる。それにどうやって一貫性を持たせるか。研究の機能とコーディネートの機能の2つが1つの立地にあるということは、それなりの意味を持たせないといけない。

(沖野委員)

- ・環境研究センターなのだから、何を研究するのかという核をしっかりとしないといけない。コーディネート機能だけならば、新しくセンターを作る必要はなくなってしまう。

どういう研究を中心に行うかを考え、それを柱にして環境学習などに反映していくことだと思う。

(傳田委員)

- ・学びの機能を考えた場合、高校生になるとSSHなどがあり、かなり研究者志向の生徒もいる。生の研究者やアクティブに動いている研究者に触れあうことは刺激となる。大学の研究者はこんな研究をしている、県の機関ではこんなことをしているということが分かれば、自身の将来像を描く上でも、すごく良い学びとなる。
- ・研究の目玉を、大学とSSHの連携などとすると将来像が見えてくるのではないか。

(沖野委員)

- ・学びのネットワークについては、近辺の連携だけではなく、全国的なネットワーク、国際的なネットワークを考えることも必要。子供たちが地域だけではなく、世界と接触できるという立体的なネットワークを考えるべき。

(傳田委員)

- ・ここに来ると最新のものに触れられる、近未来を体験できる、外国の人とも触れ合える。そうすると若者も集まるようになる。人の集いととも、活気も出てきて、地域の人も集まってくる。うまく好循環するという意味で、設備投資にお金はかかるかもしれないが、最新でインターナショナルなものを目指すという検討もしていただきたい。

■今後の進め方

(今井委員)

- ・あと2回で、どういう方向で具体的にまとめるかという姿が見えない。予算や人員は示さなくても良いので、センターのあり方はこうなので、そのあり方をバックアップするような情報を集めて、その他諸々の情報とあわせて方向性を明確に出すということとはしてもらいたい。

〈御意見に対する事務局の考え〉

※上記意見等については、今後の検討に当たり参考とさせていただきます。